

労働力の確保へ

大学と連携し援農 JAグループ山形



サクランボの選果と箱詰めをする援農学生ら
(山形県河北町でJAグループ山形地域・担い手サポートセンター提供)

農業の労働力不足が深刻化する中、人材確保に乗り出すJAが東北各地で増えてきた。栽培や収穫に多くの人手が必要となる園芸地帯を抱えるJAでは、地域内外から募ったり、大学と連携したりなど、さまざまな手だてを講じる。JAの労働力確保策がどのような成果を挙げているかを追った。

JAグループ山形は、労働力不足に悩むサクランボ農家に学生を送り込む援農事業を2017年度から始めた。大学と連携し、6月の農繁期の支援に結び付けた。サクランボだけでなく、幅広い品目で労働力を確保できるよう今春には県内JAの求人情報をまとめたサイトを同

求人サイト設け対象拡大



合宿所で地元農家らと交流を深める援農学生(山形県河北町でJAグループ山形地域・担い手サポートセンター提供)

グループのホームページに開設する。同グループ地域・担い手サポートセンターは、労働力確保と農業を学ぶ機会の提供を念頭に、山形大学と仙台白百合女子大学に協力を打診。大学が希望者をまとめた。

やまがた、てんどう、さがえ西村山、さくらんぼひがしねの4JAはサクランボ収穫最盛期の6月、無料職業紹介事業を通じて計15人の学生を農家に紹介。山形大学農学部外国人留学生ら11人と仙台白百合女子大学で栄養学を学ぶ学生4人が1人当たり平均6日間、収穫や箱詰めに関わった。

JAさがえ西村山管内の河北町の農家3戸には、外国人留学生ら5人が入った。町内でサクランボ20畝を栽培し、3人を受け入れた鈴木勲さん(59)は「収穫から箱詰めまで、とても真面目に働いてくれた。また来てほしい」と話す。

地元の農事組合法人ファーム吉田は、空き家を学生の宿泊施設として確保。交流会も開き、ベトナムやカメルーンの留学生が母国の料理を振る舞い、歌を披露した。法人代表の佐藤勝良さん(68)は「今後も交流していきたい」と話す。

同グループのホームページに開設する求人情報のサイトでは、水稲や野菜、果樹など幅広い品目での求人を紹介する。勤務地や仕事内容、期間、時給などに加え、勤務地に入るための交通費の支給の有無、期間中の宿泊や自炊施設などの情報も提供する予定。

同センターの大武義孝センター長は「人手不足が続く中で、できることは何でも挑戦する。学生の援農の輪を広げながら県内外で労働力を確保し、農家を支えたい」と話す。